

---

# アルペジリオ - 優しい商人の話 -

椎乃みやこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アルペジリオ - 優しい商人の話 -

### 【Zコード】

Z5385Z

### 【作者名】

椎乃みやこ

### 【あらすじ】

「アルペジリオ」

それは、ある世界の名前。

知らない世界の、知らないどこかで紡がれた物語。

様々な種族が暮らす世界の中で、彼女と彼たちには何が映ったのだろう。

誰もが魔法が使える世界で、少女だけ魔法が使えなかつた。  
血の繋がらない家族を持ち、ある秘密を抱えた少女。

いつの日か失ったものを、取り戻せるだろうか。  
これは、ある「嘘つきな少女」の物語。

## 第1章 嘘つきな青色

もしもし神様聞こえますか？

私の住む世界はどこかおかしくて、とてもちぐはぐです。

たくさんの異質な人達が暮らしていて、穏やかだとは言い切れません。

おかげで何度も殺されかけました。

ただの何も出来ない人間だから、不思議な力も使えないけれどそれでも私は

ここで生きていることを、人間であることを、誇りに思っています。

「力ナ、寝てるのか？」

少し低めの男の人の声。この声を聞いてシスイの声だとすぐにわかつた。

「寝てる……」

ソファーの上で眠っていた私は不機嫌な声で答えた。うつ伏せになっていた体を、じろりと回転させて仰向けになる。シスイが私の顔にランタンを当てて覗き込んできた。ランタンの光が眩しくて目を細めると、彼はやんわりと微笑んで、眠そつだなど感想を漏らした。

部屋の中は暗い。もともと私達が暮らしているところは、森の中なので電気など通っていないのだ。ソファーのすぐ側にある窓を見たら、さつきまで橙色だった空が黒色に塗り潰されていた。ぽっかりと浮かぶ月とたくさんの星が輝いている。今日も平和だなとぼん

やり思つた。

「寝るのなら、自分の部屋で寝ろ」

シスイは、ランタンを私の顔から遠ざけて苦笑した。世話がかか  
る奴と言わなくとも、顔にかけてある。私は欠伸をして体を起こし、  
ランタンの光で照らしだされたシスイの姿ざつと見た。ぼさぼさの  
金髪に、汚れた白衣。緑色の目が爛々と輝いているから、先生とお  
もしろい研究でもしているのだろう。

また私をあいてきぼりにして。

「しー兄こそ寝れば……」

「駄目だ。今いいところだから」

即答したシスイにうんざりした。

正直、私はつまらない。興味深い研究対象を見つけたら、二人だけ研究室に閉じこもつてしまつからだ。本業は学者だから仕方ないと思うけど、こちらとしてはおもしろくない。朝から晩まで先生といろんな実験をして、会話もそればかりでもちろん私はその中に入れない。食事もろくに摂らないし、先生なんかそれすらも忘れて倒れてしまつことがある。

やめてなんて絶対言えないけど、限度つてものがあると思つ。

「ふうん」

文句など一切ださずに、私は曖昧な相槌を打つた。

「そんなに俺と先生が研究することに不満か？」

「……」

不意打ちだつた。凶星だ。

恥ずかしくなつて押し黙つたら、軽く笑われてしまつた。

この人はいつもそう。私が考えていることを簡単に当てるべく、  
血の繋がつた兄妹でもないのに、人のことを妹扱いして保護者面を  
するのだ。私だって兄弟は欲しかつたけど、どちらかと言つと兄じ  
やなくて弟の方が良かつた。いやでも、この人が弟になつても気持  
ち悪いだけか。

「なんでわかるのよ……」

「なんでだろうなー」

シスイは適当にはぐらかすと、なれなれしく私の隣に座った。ソファーと向かい合わせのテーブルにランタンを置く。ポケットから煙草の箱を取り出したのを見て、私は睨んだ。

「またそんなの吸ってる」

「大丈夫、はまつてなんかないさ」

しゅぼつと音がして周囲が一瞬明るくなつた。

煙草独特の臭いが鼻につんとくる。

「すぐにやめてよ」

「うん、煙でも力ナに影響するからな」

そういう意味じやないのに。前々から思つていたけど、この人は自分のことより私や先生のことを優先する性格だと思つ。いわゆる『他人のために犠牲になるタイプ』。

「しー兄は、格好悪いよ」

私の発言にシスイは変な顔をした。

「そつか

特に質問したりせず、煙草を口に銜える。煙草は大人になつてから吸う物だと教わったから、未成年のシスイには似合わない。ちぐはぐで、なんだか変な感じがするのだ。

「最近、元気がないから、先生が心配していただぞ」

「……そつか」

先生と言うのは、私を拾つてくれて育ててくれた生物学者のこと。私は捨て子だつた。昔の記憶はあまり覚えていない。思い出したくもない。自分の本当の親と思われる人達に手をひかれて深い森の中を歩かされて暗い森の中においていかれて暗い暗いあの森の闇の中に聞こえた音が恐くて金色の瞳が

「カナ」

呼ばれてどきりとした。首筋に冷や汗が流れている。

今は春なのになんだか肌寒い。

「カナじやなくて、カナラ」

私は気を取りなおすと自分の名前を訂正した。先生からつけてもらつた大切な名前なのだ。勝手に変えてもらわないで欲しい。

『力ナラ』。それが、今の私だから。

「いいじゃなか別にー」

「シスイさんつて呼ぶよ……」

ぼそりとやや声音を低くして言つと、シスイは物凄く悲しそうな顔をした。

「駄目だつ、絶対に駄目！　しー兄つて呼んでくれつ」

「なんでそんなに必死なの……」

若干呆れながらも思わず笑つてしまつた。小声でくすくす笑つていたら、シスイが頭に手を置いてきた。私が嫌な顔しているのを無視して、そのまま髪の毛じとぐしゃぐしゃ撫でてくる。

「いい加減にしてよつ」

シスイの手を追い払うと、残念とにやにや笑つた。叩かれた手をひらひらさせてくるあたり、妙に腹が立つてくる。私が睨むと溜息をつき、まだ充分に長さが残つてゐる煙草をテーブルの灰皿に押しつけた。

「怒るなよ」

「またそうやつてすぐ子供扱いする」

「子供じやなくて、妹扱い」

「変態臭い」

シスイはそうかあと不思議そつに首を傾げた。

「力ナは家族だからそうなるだろ」

「誰も血なんか繋がつてないのに？」

「もちろん」

森の中にぽつんとある一軒家。暮らしている人間は、誰一人血など繋がつていない。一人は三十路を過ぎた生物学者、一人はその愛弟子、一人は親に捨てられ拾われた娘。

それは、疑似家族。

私が、私なんかが、その家族の枠の中に入つてもいいのだろうか。

私が捨てられた本当の理由を、彼らは知っているのだろうか。  
深い森の中、聞えるのは低い低い雑音と似ているあの音。  
あそこで見たものを、彼らは見たのだろうか。

本当は、私はあの場所で

いかないであれがくるからいかないで

私は頭を軽く振った。

今のことは思い出しちゃいけない。何もなかつたことにするんだ。  
「俺は今、結構幸せなんだ」

シスイは時折、変なこと言い出す。私が訊く前に彼は言った。  
「先生とカナがいるから、幸せだ」  
自信たっぷりにそう答えられるあなたが、酷く羨ましい。

## 嘘つきな青色（2）

「カナラ、どうだつた」

その部屋は、これでもかと言わんばかりに「こたごたしていた。床には大量の紙や書物が散らばり、棚には乱雑に物が置かれていた。白骨化した何かの手が棚から下がつてているかと思えば、瓶詰めにされた生物がじつと見ているような気がする。大した広さもないのに、よくこんなにも物が溢れるものだ。相変わらずこの部屋はとんでもないところだな。シスイは改めて実感しながら、足で適当に物をどかして部屋に入り込んでいった。

「駄目です、先生。相変わらず元気がありません」

先生と呼ばれた男は椅子に座っていた。分厚い本から顔を上げ、眼鏡の奥の目を細めて笑う。

「シスイはまたカナラに嫌われたようだ」

黒髪、黒目。風を守護とするこの国では、珍しい容姿である。髪を切るのが面倒なのか、伸ばしたまま後ろで一つに縛つていた。シスイと同じように白衣を着ているが、何日間も洗つていらないらしい。シスイの白衣よりかなり汚れている。

「先生、痛いところ突かないで下せこよ」

シスイは苦笑した。梳いていない金髪頭をかきながら、カナラは反抗期なのかと尋ねる。

「それもあると思つよ。ちょうど思春期つてやつかな」

「思春期……」

初めて聞いた言葉のように口の中で数回繰り返したが、それでもシスイは納得しないらしい。険しい表情で考え、溜息をついたあと、頭を振つた。

「でも、様子はおかしいです。自室に戻つたと思いますが、おそらく

く、また

「ラジオを聞いているんだね」

男はシスイと目を合わせると、同時に頷いた。

「電波なんて届かないはずなのに、カナラは何を聞いているかわかる？」

「ノイズ、じゃないですか」

「だろうね」

男は困ったなとシスイに聞こえないように呟いて、分厚い本をぱたんと閉じた。

男の後ろにある窓は開いていた。換気のために作られた小さな窓で、決して大きくはない。窓から入ってくる風はどこか冷たく、季節は春だというのに冬の気配が残っていた。空は晴れていて雲一つないが、その分、月が大きく輝いて気味が悪い。シスイは丸い月を一瞥し、視線を戻した。先生と慕う男は何も言わない。ただ愛弟子を見ているだけ。シスイは逡巡し、だいぶ間を持たせた。苦々しく吐きだした言葉は、低く、小さなものだった。

「……カナは、純血なんですか」

シスイの発言に男は返さず、代わりにこんなことを訊いてきた。

「カナラは、どうしてあんな所にいたんだろうね」

シスイは俯いて口を閉ざした。それでも男は問いかけを続ける。

「カナラは、どうして綺麗な服を着ていたんだろうね」

「……」

「まるで、お嫁にいくみたいたつたよね」

「先生それは」

はつとしたように顔を上げたシスイに、男は優しく微笑んだ。

「うん、シスイもわかっているんだろう」

シスイが神妙な表情で頷く。

男は窓の外を眺めながら、今日は月が大きくて不気味だねえとぼやくと

「生贊だろ、あの子」

静かな声で、はつきりと言つた。

「力ナを見つけたときから、わかつていたんですか」

疑問符がない、どこか確信めいた尋ね方。男は肩を竦めて吐息をつき、困つた顔で笑う。

「ひと氣のない森で真っ白なドレスを着て、手首と足首を縛られた女の子を見たら、まあ予想はついたやうけどね。シスイはわからなかつた？」

「いや、あの頃の俺は……。あまり力ナのこと、好きじゃなかつたので」

興味がなかつたんです。もっと早く氣づいてやるべきだったかなと、今頃後悔する自分が嫌でたまないと愚痴をこぼす。男はそとかとなぜか嬉しそうに何度も頷いた。

「でも今じや立派な『お兄ちゃん』じゃないか

「力ナは認めてくれませんけどね」

「そんなもんでしょう、家族つて」

「そんなもんですか」

シスイはどこか諦めたように笑うと、表情を引き締めた。先生と呼ぶ男の目を真正面からじっと見つめる。男もシスイから目を逸らさずに、穏やかな顔で見ていた。

「力ナは、力ナラは、正真正銘の純血の人間だから生贊にされたんですね。純血は珍しいから、気味悪がられたのでしょうか。それとも、もっと別の理由があるのでしょうか。夜中にラジオのノイズを聞くのは、それと関係あるんですか。先生、はぐらかすのはやめて、いい加減教えて下さい。力ナは何も答えてはくれません。長い時間、一緒にいるのに、何も」

男は椅子にもたれかかり、だらしなく足を机の上に乗せた。その拍子に何枚かの紙が散らばつたが、別段、気にした素振りを見せない。誰も何も言わず、気まずい沈黙が流れる。シスイは下唇を軽く噛み、男が口を開くのを待つた。

やがて男はやあと声をあげ、淡々とした口調で話し始めた。

「僕はカナラじゃないから、あの子が何を思つて、何を抱えて考へているか、全てわかることはできないよ。でも、考へることはできるからね。だから、時々、思うんだ。カナラを拾つてシスイとこうやって話をして、僕は楽しいよ。毎日が嬉しいよ。でも、カナラはどうなんだろうね。本当に、拾つて良かつたのかなって実は思つてる。あのままにした方が良かつたんじゃなかつて思つてる」

「それは、見殺しにした方が良かつたつてことですか」

男は躊躇いもせず、相変わらず穏やかな顔でうんと返事をした。「ラジオのノイズ。きっとあの森の中で、似たような音を聞いたんだと思うよ。一種のトラウマだろうね。今でもそれをひきずつていのなら、助けてあげたいと思う。でも、僕が思うに、彼女は本当は死にたかった、じゃないのかな」

シスイは黙つて男の言葉に耳を傾ける。窓から入つてくる風が床に落ちた紙を拾い上げ、宙に舞い上げた。ふわりと浮かんで落ちていく紙がどこか幻想的に見える。外の木々が木の葉を鳴らして、かさかさ音を立てた。今日は風が強い日だ。

「いつたいどういうわけで、彼女のような純血の人間が生まれたのか知らない。今の人間は少なからず、何かの血が混ざつているからね。例え珍しい純血が生まれたとしても、その存在はほとんど言つていいほど必要とされないんだ。他種族の力がない限り、僕たち人間は魔法が使えない。だから、彼女のような魔法が使えない子は、ようするに『いらない子』なんだよ」

『いらない子』。シスイは口を開きかけたが、男は手を前にだして遮つた。

「カナラは、わかつていたんじゃないのかな。自分がそういう存在であることを認めて、受け入れていたと思うよ。僕はそう思いたくないけれど。あのとき、僕らが彼女を見つけたとき、あの子は泣かなかつたね。下手したら生贊として、魔物か何かに食われるはめになつていたのに。助けても言わなかつた。僕が抱えなかつたら、あの場にずっといたと思うよ」

泣かなかつたね。男はもう一度繰り返した。男は息を吐くと、沈黙を守るシスイに笑いかける。一言、『くわかつをまと。

「僕の『勝手に力ナラの考へていいことを想像しちゃえ講座』はこのおしまい。今後の課題としては、どうするべきかわかっているよね。さて、僕はまだやらなくちゃいけないことがあるから、いつも通り徹夜するけど。シスイはどうする。寝るかい？」

シスイは緑色の釣り田を細くして、首を振った。先生らしいなあと零して

「もちろん、つきあつつもりです」

心から嬉しそうに、朗らかに笑った。

の、ゆるしへ、じめんなさい、だからいかないで、おねがい、こわい

あれがくるから、あれがくるの、  
ごつごつした」」はおしゃがり、

たつてわたしにはきこえるから、おとがあのおとか  
なんだかないときこえるから、わたしまでかなしくな

わる

だつてわたしもでれみじくなるから

す」とかおんじでいたのだと、おだしてしまふにそで

だから、おねがい、いかないで

ラジオのノイズ音で目が覚めた。なんだかとても嫌な夢を見たような気がする。たぶん、昔の夢。私がまだ『私』じゃなかつた頃の話。一番忘れない記憶で、一番忘れない記憶。

私はベッドから起き上るとラジオの電源を消した。ijiのところ、なぜだかラジオを聞いていないと眠れない。森の中だから電波なんて届かないし、放送なんて全く聞こえないのに。いや違う、本当のところはラジオのノイズを聞いているのだ。あれを聞かないと、なんだかとても恐ろしい。

「朝」はなん作りなさや……

そうでもして無理やりあの男共に食べさせないとまた倒れてしまつ。ベッドから下りて、カーテンを開けると朝日が畳に染みた。今

日も快晴のようだ。昨夜は風の音が凄かつたから、雲が飛ばされたのだろう。寝間着から普段着に着替え洗面所へと向かう。洗面所には先客がいた。

「しー兄」

「ん。カナ、おはよう」

シスイの目下に隈ができていた。どうやらまた徹夜をしたらしい。洗った顔をタオルで拭き、私に近づくといきなり髪をくしゃりと掴むように撫でてきた。露骨に嫌な顔をすれば、小さく声を上げて笑つていて。

「先生からの注文、朝ごはんはコーンポタージュがいって」

「先生が『はんのこと忘れてないなんて珍しいね』

ぺちり。勝手に頭を撫でているシスイの手を叩きながら言った。叩かれることに慣れているせいなのか、特に嫌な顔もせず、シスイはにこにこ笑つていて。なんだかまるで、私と会話することを楽しんでいるみたいだ。

シスイの瞳は緑色。生物というのは、生まれた環境によつて体质が変わつてくると聞いたことがある。それならば、きっとシスイは先生と一緒にずっと森の中にいたから、目が緑色になつたんじゃないかと勝手に思ついた。森の色、決して悪いものじゃないと思つ。「俺も好きだから、カナのコーンポタージュ」

「ふうん」

なんだかんだ言つて、自分の料理に好意をもつてくれるのは嬉しい。少し奮発して、多めに作つうかと考えてみる。それと同時に、そろそろ買い出しに行かなきゃいけないことを思い出した。

「『はんできたら、ドアの前に置いとくからね。あと、洗濯物はちゃんと出して。先生に体を洗わないと、臭いおじさんつて軽蔑するよつて伝えといて』

言つてから、我ながら主婦臭いと思つた。いや、『家族』の役割で言つと『しつかり者の妹』と言つたところだろうか。そう考えるとなんだか妙な気分になつた。私にこの役割はあまり向いていない

ような気がする。家事は嫌いじゃないけど、私は外でシスイと特訓する方が好きだ。

「しー兄、また特訓やつてよ」

特訓と言つのは体術の訓練のことだ。シスイは学者の卵で身体がひょろつとしているくせに、なぜだか体術が非常に上手い。何度か取つ組み合いをしたことがあるけど、いつも負けてしまう。例え向こうがハンデをつけてもだ。

「あー、しばらぐの間は無理」

「そう」

予想していた答えだけに素つ氣なく返事をすると、シスイの手からタオルを奪い取つた。

「洗濯にだすから使うよ」

「どうぞ」

朝ごはん待つてゐるからとシスイは言つて、洗面所を出て行つた。

私は顔を洗う。少し前まで川の水を汲んで使つてゐたけれど、今は地下水から汲み上げてゐるらしい。蛇口を捻れば簡単に水が出る。今までと変わらず綺麗な水で害はないけれど、使うのにためらつてしまふのだ。何度も外に行かずにするようになつたのに、この便利さになかなか慣れないのでいた。

水で濡れた顔を上げ、目の前の鏡に映る自分を見る。青色の目で、背中まで伸びつつある銀の髪。私はあまりこの髪の色を気に入つてない。銀色なんて中途半端だ。先生のような黒髪が良かつたなと思う。もう少ししたら髪を短くしよう。せめて肩ぐらいの長さまで切ろうかな。でもそんなことしたら、せつとシスイが口づめるやく言うに違いない。

ふと、自分の青色の目が気になつた。

もし、シスイの瞳が森の色なら、私は何の色なのだ？

## 嘘つきな青色（4）

「朝」はんできたよ

四角いお盆の上から「ローンポタージュ」とこんがり焼けたトーストの匂いがする。豪華にしようと思っていた朝食は、あまりにも材料が少なすぎて断念。どうして今まで気づかなかつたんだろうと返つて不思議に思つてしまつ。家事は私の担当の仕事だから、食べ物の管理ぐらいしつかりしていただつもりなのに。なんだか悔しい。もう一つ言うなら恥ずかしい。次からは気をつけなきや。

ドアを三回ノックすると氣だるそうな男の声が聞こえた。これは先生の声だ。どうやら倒れずに無事に生存しているらしい。私は研究室に入つてはいけないことになつていて、ドアの前にお盆を置いた。ずっと前にその理由を尋ねると、教育上あまり良くないからと先生に苦笑されたこと覚えている。だったらシスイはどうなのだろうとつい文句を言つてしまいそうになつたけれど、あの人は先生の『愛弟子』だから『娘』の私とはまた違うのだ。あまりそういうのは好きじやない。だから私は、あの二人が研究に熱中し始めると、少しだけ不機嫌になつてしまつ。

じついう感情を『嫉妬』つて言つんだらうな。

ドアの前にお盆を置き、買い物に行つてくると告げると、シスイの声が聞こえた。

「今日はヤシロさんがあると思つから、あの人に街まで連れて行ってもらえ」

「……了解」

ヤシロと言つのは月に数回やつてくる行商人のことだ。外に出ず、ひきこもり生活をしている先生はヤシロにとつて格好の客だらう。彼は大陸で生れた人間ではなく、先生と同じ東の国で生まれたらしい。ヤシロと言つ名前をあちらの国の文字で書くと『夜白』と表記するとか。何か意味があるのかと訊いたら知らねと返されてしま

つた。

あの商人が売る物は値段が高い。近くにある街の店の方が安いので、私はできるだけそこで買うようにしている。暮らしている場所が場所だから、場合によっては仕方なくヤシロから買つているのだ。ヤシロと先生は旧知の間柄らしく、それなりに仲がいい。お得意様と言うこともあって、ヤシロが来たときに街まで送つてもらうことができる。

ただし、物を買わなきゃいけないことが条件になっているのだが。ヤシロは月の中頃にやつてくる。それも決まって、物に不自由しているところを狙つてだ。本人は商人の勘だと言つているが、私はあまり信用していない。

それ以前に、私は

馬の鳴き声と車輪が止まる音。商人がやつて来た。ノックもせず

に我が物顔でドアを開いて、私を見ると清々しいほどの商人スマイルで笑う。

「力ナ嬢、みつけ

「今すぐ引き返して下さい」

私は、この男が大嫌いなのだ。

「それから、私の目の前から消えてもらえませんか

「うわー、相変わらず嫌われているな。おれ」

茶色の髪に茶色の瞳。人懐っこい瞳で私を見て、とっくに成人を迎えているくせに、子供っぽくけらけら笑う。私は商人を思い切り睨みつけた。どうしてか忘れてしまったけど、私はこの人のことが嫌いで苦手で、会話するのも嫌なくらい駄目なのだ。

「力ナ嬢、あんまりそう嫌うなよ。商売やりにくいんだよな」

「気安く力ナ嬢と呼ばないでください。それから、私の名前は力ナ嬢じゃなくて、力ナラです」

「可愛くねえ、餓鬼」

ぱつりと呟いた商人の言葉を私は見逃さない。黙つたまま睨んでいると、商人はわざとらしい素振りで両手を上げて「おお、怖い」

と言つた。なんだかとてつもなく殺意がわいてくる。

「んじゃあ、いつものように商売始めるけど何が足りない?」

「欲しい物はありますが、街で買います。送つてください」

こんな人に頼むなど本意ではないが、仕方ない。家計のためだ。

少しごらい我慢しなくては。

「じゃあ、何か買つていけ」

「たまにはタダしてくれたつていいじゃないですか。商人さん」  
皮肉っぽく笑うと、商人はそれこそ子供のように不満そうな声を上げた。

「嫌だね、却下」

「ケチ」

「ケチで結構。おれは商人だから」

むしろそれでいいんだよ、どこか安堵した表情が、いつもの彼らしくなくて奇妙に感じた。

「何、これ」

商人愛用の幌馬車に乗り込み、たくさんの積み上げられた木箱を一つ一つ覗きながら品定めをする。木箱の中は様々だ。食品や衣類だけではなく、薬草や錠剤、本に宝石類まで。森暮らしの私は外の世界をあまり知らない。だからだろうか。ヤシロが仕入れてくる商品にはとても興味があつた。実はお気に入りの小型ラジオも、この人から買った物だ。最初はカメラにしようかと悩んだけれど、声が聞けると聞いてラジオを購入することに決めたのだ。でも、森の中だから電波が届かないことを教えてくれなかつた彼を、今でも恨んでいたりする。

適当な衣類と薬草を選んでいると、他の箱より一回り小さい物を見つけた。この箱は勝手に開けては悪いのかも知れない。ヤシロに断りを入れておくことにした。

「これ、開けていいですか?」

馬車の馬を撫でている彼に、箱を見せて尋ねた。

「ん、ちょっと待て」

ヤシロは馬から離れ、身軽に荷台に乗りこむと、箱を見てにやにや笑つた。

「力ナ嬢は御目が高いなあ。いいぞ、開けて」

役者ぶつた台詞に嫌悪感を抱きつつそつと箱を開ける。

「これつて」

「最新の拳銃。自動式だ」

黒光りした重たそうな拳銃が箱の中に収まっていた。ヤシロを見上げると顎で触つてみると促してくる。恐る恐る手に取れば、ずつしりとした感触があつた。自動式拳銃はとても冷たくて、だからこれが人を殺す道具なのかと妙に納得した。拳銃自体、初めて見る物じゃない。シスイが護身用として携帯している小型の回転式を見たことがあるのだ。あれはこれと違つて軽かつたから、本当に人を殺せるのかと疑問に感じた。でもこれは、確かに殺害できる道具だ。

「なんだか、悲しくなつてきた……」

重たい。でもこれが命の重みだとと思うと軽く思えてくる。この世界には生き物を傷つけるものが多いと思う。拳銃にしたつて、私が使えない魔法にしたつて、例えそれが道具ではなく言葉にしても、この世界はどこかおかしい気がする。

拳銃を握りしめたまま、自分の肩が震えているのがわかつた。私は何かに怯えていることに気がついた。何かつて何だろう。何に恐怖しているんだろう。

黒、黒色、真つ黒。何も見えない色。

それは暗闇。

「肩、震えているぞ」

ヤシロに手を置かれて、思わず肩が跳ねた。私は自分の肩が跳ねたことに驚いた。だけど、ヤシロは私よりも驚いていた。茶色の目を大きく見開いて、ぽかんとしている。やや首を傾げて心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「カナラ、大丈夫か？」

その行為に思わずびざまきしてしまった。

慌ててヤシロから少し距離をおいて頷く。

実際は大丈夫なんかじゃない。未だに拳銃を握っている手はかたかた震えているし、背中に冷や汗をかいしているのがわかつた。拳銃を放せば体の震えは治まるのではないかと思う。けど、なぜか手が開かなかつた。強く黒い鉄の塊を握りしめたまま放してくれない。私は手の中にある物に、もう一度目を向ける。

ゆつくりと視線を滑らせて、拳銃の先、銃口で目が止まつた。

ああ、私は、

「お前に拳銃は似合わないな」

はつとした時には、私の手の中にあの黒い塊はなかつた。隣でヤシロが拳銃を片付けている。ぽかんとしたまま突つ立つていて、ヤシロは私を見ずに先程の言葉をもう一度繰り返した。

「お前に、それは似合わない。シスイにでも売つておくさ」私は何も言わず、その言葉をただ黙つて聞いていた。

## 嘘つきな青色（5）

森を抜けたら街道にでる。街道を一直線に走つていくと街に入る。街の入り口付近には大勢の商人が露店を開き、賑わっていた。滅多に人が来ない森の中に住んでいる私にとって、人がたくさんいる所は少しばかり緊張してしまつ。がたがた揺れる幌馬車の荷台から街の様子を窺うと、多くの種族が行き交つていた。

例えば、誇り高い獣の血を受け継ぐ獣人、絶滅した巨人族の子孫にあたる超人、神の使いと崇められた聖族。それから、人間。今ではもう、純粹の血が通つてている人間はほとんどいない。

「へえ、魔族がいるぞ」

手綱を握りしめながら、ヤシロはやや興奮を押さえた声で言つた。ヤシロの左手の甲が反射して、ぎらりと光る。鉛色のそれ。彼の手の甲をべつたりと覆う鉛色は、皮膚そのものだ。ヤシロだって純血の人間じやない。超人の血が混じつた人間だ。この人の皮膚は、鉛と似ている成分でできていると先生が言つていた。異種の血が混じつた人間。それがこの世界の『普通』。

「魔族？」

幌馬車の幌をめくつて外の様子を見てみるけれど、誰がその人なのかわからぬ。馬車は移動しているのだ。もしかしたら、通りすぎたのかも知れない。

「わからないや……」

半ば諦めて顔を引つ込めようと思つたとき、ヤシロが声を張り上げて後ろと指示をだした。

慌てて幌から顔をだして覗くと、流れ行く人の中で赤い髪の女人を見つけた。遠目で見てもその人の姿だけ、はつきりと目に映る。なぜ今まで気づかなかつたのかと不思議に思つくらいに、とても目立つていた。赤いのは髪だけじやない、瞳の色も真つ赤だ。あれは、血の色。

「魔族は夜行性って聞いたんだけどな。昼でも活動する奴はいるのか」

「綺麗な人……」

「魔族と聖族はべつぴんが多いからな。骨抜きにされるなよおちよぐるようになつてきたヤシロを見て、私はにやにや笑いを返してやつた。

「鼻の下を伸ばして見ていた癖に、よくそんなことが言えますねヤシロがぎよつとした。図星なのがどうかわからぬけど、顔が真つ赤になつている。

「……お前つ、大人をからかうな!」

「ヤシロさん顔赤ーー！」

「笑うんじゃねえ！」

慌てて弁明しようとするヤシロがおもしろくて、ついつい私は大声で笑つてしまつた。

そういえば、大声をだして笑つたのは結構久しぶりかも知れない。最後に笑つたのって、いつだっけ。いつだろ？

今度は人を見るためではなく、空を見るために顔をだす。空はとても綺麗な水色をしていた。風にゆつくりと流されて行く雲を見ながら私は考えてみる。思い出してみる。でも、なぜか思い出せなかつた。

私はヤシロから商品を買わない代わりに、店番を手伝うと申し出た。断れると予想していただけに、あっさりと承諾されてしまったものだから心底驚いた。何か裏があるんじゃないかと思いつつ、街まで連れてつてもらえたのはいいんだけど。

「お客、来ない……」

幌は全て取り払われており、今は商品が見やすいように木箱の蓋は開けられて並べてある。荷台に座つてぶらぶら足を揺らしながら、私は昼食のサンドイッチを口に入れた。

「つまんない」

ヤシロは行くところがあるからと言つて、どこかに行つてしまつた。一人、行き交う人々を眺めながら溜息をつく。だいたい、何も言わないヤシロが悪いのだ。店番なんて初めてなのだから、少しうらい客が寄つてくる方法とか教えてくれればいいのに。

「ヤシロのいじわる」

彼を呼び捨てにして悪態をついた。その後、彼が呆れた顔でやつてくることに期待しながら周りを見渡してみるけど、それらしい姿は見かけない。私は舌打ちをすると「ごろんと仰向けになつた。見上げた先に空なんかない。あるのは、幌馬車の天井となる梁。

「ばーか、ばーか。ヤシロの馬鹿」

我ながらガキ臭いと思いつつ、歌うようにその台詞を吐いてみる。言つた後、妙におもしろくなつてきてヤシロの歌でも作つてやろうと思いついた。何かの替え歌にしようか。そして、帰つてきたヤシロを困らせてやるんだから。そう考えるとなんだか楽しくなつてき

た。

残りのサンディッチを頬張つて、私は起き上がつた。

起き上がつたら、目の前に赤い髪と瞳を持った女の人が立つてい

た。

「……」

いつのまに荷台に乗つてきたのだろう。どうすればいいのか対応に困つてそのまま固まつていると、彼女はくすくすと笑いだした。ふつくらとした桃色の髪、整つてゐる綺麗な瞳に、ふわりとした柔らかそうな真つ赤な髪。そして、夕日よりも濃い、血液と同じ色をした瞳。

妖艶。その言葉が彼女にとつても合つていた。

「ここにちは、小さな商人さん」

透き通るような声を聞いて、思わず姿勢を正した。この人、ヤシロが言つていた魔族だ。遠目でから見てもそつだつたように、綺麗な人である。同性の私でさえ見惚れてしまつくらいに。

「えつと、な、何をお求めですか？」

声が裏返つている自分に嫌悪をしつつ、すぐさま立ち上がりて尋ねた。彼女を直視できず、どうしても顔から目を逸らしてしまつ。初めてのお客さんだから逃しちゃいけないのに。何やつているのよ、私。

「そうねえ、一つ訊いてもいいかしら」

「え、はい。どうぞ」

「あなたは、売り物なの？」

今、この人、とんでもないことを言つた気がする。

私は逸らしていた目を彼女に向けた。

彼女は顔色を変えず、同じ笑顔を保つたまま私を見ていた。その微笑に悪寒を感じてしまった。

「冗談を言わないでください。私はただの売り子ですよ」

「へえ、そうなの？」

彼女は一步近づき手を伸ばしてくる。鋭く長い爪を見て、私は身を引いた。

「そんなに怖がらなくともいいじゃない。別に取つて食おうと思つているわけじゃないのよ」

「ごめんなさい、悪いですがそうとしか思えません」

後ろのベルトに取りつけてあるナイフの柄をそつと握る。ナイフの使い方はシスイに教わつた。もし、食われそうになつたら、容赦なく相手を切りつければいい。

私は、静かに息を吐く。瞼を閉じたのは、ほんの刹那。

大丈夫。感情を押さえつけることは慣れている。

昔、やつていたことと同じことをすればいい。

彼女から一步引き、相手の出方を見る。睨みつけると、彼女は優しく笑つてこう言つた。

「あたし、あなたのこと好きだけど嫌いだわ」

笑顔と釣り合わない矛盾している言葉。

笑つているのに優しく微笑んでいるのに、なぜか安心できない。

「どういう意味ですか……」

「どういう意味って、そういう意味」

「あなたに、好かれようと嫌われようと関係ありません」

「それ嘘よ。今、あなたは嘘をついたわあ」

私は顔を顰めた。似たような言葉を、前にも聞いたことがあるような気がする。

「誰だっけ。誰が、言っていたんだっけ。

「いつもやつやつて嘘をついているのね、嘘つきな商人さん」

「今まで自分に嘘ついているんだ。この嘘つきめ」

思い出した。忘れていた。私、だからあいつのこと嫌いだったんだ。

本当のこと、言われたから。先生にもシスイにも隠していたのに、簡単に見破つてきたから。

あんなやつなんかだいきらい。あんたなんかだいきらい。

「何の話ですか」

彼女はまあとわざとらしいう声を上げ、頬を両手で包みこむようにして再び笑った。

「また、そうやつて誤魔かす。そんなことをしているから、『本当』を忘れてしまうのよ。とっても久しぶりに人間臭い匂いがしたから、どんなのかなつて思つて来てみたのに。全然、全く、面白くない。歪んで崩れて捻くれて。綺麗じやないわ。美しくないわ。かわいそうな子」

どにか歌うように、彼女はそんなことを言い始めた。彼女が動くたび、群青色のワンピースがひらひら揺れる。スリットから艶かしい太股がちらちら見えて、なんだか見ちゃいけない気がした私は慌てて目を逸らした。

「私の何がわかるって言つんですか」

低い声でぼそりと言い返す。

初対面の人に、そんなことを言われる筋合いは全くない。

「ねえ、もしかして、貴女は純血？ それって、と一つても危ないことじゃない？」

私は何も言わなかつた。彼女を睨みつけるだけで精一杯だつた。純血の人間だから何。何が言いたいの。軽蔑されて、下手に同情されて、かわいそうと言われたことは何度もあつた。かわいそうなんで言葉だけ。結局、最後はいらないもの扱いされて捨てられた。私の手を引いたあの人たちから、温もりなんかこれっぽっちもなかつた。

うそつきなのはあっちの方だ。

「本当はわかつてゐる癖に、だんまりをするのね。でも、否定をしないってことは、やつぱりあなたは純血つてことかしら。あのね、かわいそうな子。せつかくだから教えてあげるわ。珍しいものは、高値で売れるつてこと、知つている？」

「それが、何」

「だからあたしは売り物かつて訊いたの。貴女、連れがいたでしょ。馬車から一緒に見ていたのを知つてゐるわ。その人が貴女を売るのかと、てつくりそう思つていたんだけど」

## 嘘つきな青色（6）

「遅い」

「悪い」

とんでもなく短い会話のやりとりだ。

ヤシロが帰ってきたのは、魔族の女の人が去つてから三十分ぐらいたつてからのことだ。私は仏頂面で膝を抱えて丸まるようにして、荷台に座っていた。私の不機嫌な様子を見て、予想通りヤシロは呆れた顔で溜息をつく。

「不機嫌になるな」

「つるさい」

荷台に上がり、後ろに積みあげてある木箱の中を一つ一つ確認していくとまた溜息をついた。

「全然、売れてないじゃないか  
話す気なんてなかつた。」

黙つていたら、あいつはいきなり私の頭を撫でてきたのだ。

「……つつ！」

恥ずかしくなつて顔が熱くなつた。私はヤシロの手を振り払い、睨みつけた。きっと私の顔は真つ赤だろう。何しろヤシロが楽しそうに、にやにや笑いながら私の顔を指差したからだ。

この人は、出会つてすぐに見破つたのだ。何の躊躇いもなく、私を嘘つきだと言い放つた。

だから私はこいつのことが大嫌いなのだ。  
嫌い、大嫌い。大嫌い！

「ほらそう赤くなるなつて、おれの用は終わつたから次は力ナ嬢だな。どこに行きたいんだ？」

「いっぱいです」

「もつと具体的に」

私は膝を抱えたまま、小さな声で行きたい場所をぽつぽつと書いていく。ヤシロは聞きながら、そこよりもここの方が安い、質がいいなど言つてきた。助言なんていらない。はつきり言つて余計なお世話である。ほつとけ。

「そんじゃあ、いつちょ向かいますか」

「お願ひします」

心を込めずに言つと、今度は頭をはたかれた。

「何するんですか」

「お前さ、それ止め」

「何を」

「わざとらしい敬語を使うな。しかも、嫌いな奴にしかやらないだろ」

私は何も言わず俯いた。ヤシロが手綱を取り、愛馬に軽く話しかけた後、車輪が動いて荷台が揺れた。がたがたと車輪が回り、馬車が動き出す。

「また、見破られた……」

絶対にヤシロには聞こえない小さな声で呟いた。

私の足元に何かがぽとりと落ちた。丸い、円のような染み。ふと気になつて、そつと自分の足元に手を伸ばしてみる。それは生温い液体だつた。

ああ、どうして私は、泣いているのだらう。

別にあの魔族のお姉さんの言葉を鵜呑みにしているわけじゃない。ただ、あの人の言葉が少しばかり気になつただけで、頭にひつかつたわけで。ヤシロのことは大嫌いだけど、信用していないわけじゃない。大嫌いだけど、先生と仲いいし、悪い人じゃないから。

「……」

なのに、私は自動式拳銃を握りしめていた。

ヤシロはそのことに気づいているのかそうじゃないのか、それは

わからない。わかることは、私がこれを手に持つていいこと。人を殺す道具を、しっかりと握つていいこと。

彼は鼻歌を歌つてゐる。機嫌がよさそうに歌つてゐる。いつもと同じ、特に変わりもなく幌馬車が動いてゐる。私は幌をめくつて外の様子を見た。街道を走つてゐる馬車から、ぽつぽつと何人か見かけたけれど、街の商店街よりも賑わつてはいない。

私は顔を引つ込めて、隣に置いてある荷物を横目で見た。食材に、衣服に、食器類に。ついでに本も買つてしまつた。纏められた荷物の中につだけ紙箱がある。その長方形の箱は他の箱とは違ひ、可愛らしい絵柄が描かれていた。私は箱を引き寄せ、改めて中身を確認した。

「これ、本当にいいの？」

それは、クマのぬいぐるみ。箱から取り出して膝の上に乗せてみる。ふわふわの柔らかい毛並みに、垂れ目の黒い瞳が愛らしい。首元につけたチェック柄のリボンがお洒落だ。

「ああ、クマだろ？　いいよ、くれてやる」

ヤシロは馬車の運転に集中しているのか、こひらを見ずにさりげと言つた。

「高いでしょ」

「ガキがそんなこといちいち気にしてんじゃねえ。ありがたく受け取れよな」

「私、いらない。こんな子どもっぽいもの」

「ガラスにへばりついてまで、見ていた癖にか？」

本当のことだから、何も言い返すことができなかつた。膝の上に乗せたまま、クマの頭を撫でてみる。森暮らしの私はおもぢやに触れる機会が少ない。ぬいぐるみは新鮮で、なぜか懐かしくて。片手はそつと頭を撫でていたけれど、もう片方の手は拳銃を握り締めたままだつた。

黒い、鉄の塊。最初に触つたときのよつた震えはなかつた。ただ、拳銃を見ていると、どうしても視線が銃口に向いた。この道具の使

い方も知っている。小型のものになるけれど、安全装置の外し方を一度だけシスイに教えてもらつたから。

わかつてゐる。私が『カナラ』と言つ名前を貰つても、先生とシスイと『家族』となつて暮らしても、本当のところは、何一つ変わつていないことぐらい。

自分に嘘をついてゐることぐらい。

自分が空っぽなことぐらい。

知つてゐるよ、ずっと前から。

この感情も、きっと嘘なんでしょうね。

演じてゐるだけで、偽つてゐるだけで、実際は何も感じていないのね。

「お礼ぐらい、言え」

「……ありがと」

感情をこめず棒読みで言つた。ヤシロが怒るのではないかと思い、彼を見ると、背中を向けたまま何も言わず進行方向に頭を向けていた。顔はこぢらを向いていないので、表情はわからない。でも、きっと今のヤシロは私と同じ無表情じゃないのかと、そう思つた。

私はクマのぬいぐるみを抱きしめて、『ころんと寝転がつた。自動式拳銃とクマのぬいぐるみ。なんともおかしな組み合せである。先生の家まで、あとどのくらいかかる?』

「小一時間ぐらいかな」

肩越しに振り返り、寝転んでいる私を見てなぜか笑つた。

「寝てる。疲れただる」

ヤシロの茶色の瞳。シスイの色は森の色。じゃあヤシロの色はいつも道を見て馬車を走らせているから、きっと道の色だ。勝手にそんなことを思いついて、私はゆつくりと田を廻つた。

がたがたと馬車が走る。がたがたと荷台が揺れる。横になつて木の床に耳を当てれば、車輪が動く音が聞える。一定のリズムで、永遠に続くんじゃないかと錯覚してしまいそうになる。

変わらない音、変わらないもの。それはどことなく、あのラジオ

のノイズに似ているような気がした。

まどろみながらふと思つた。どうしてヤシロはひかりを見たのに、私が拳銃を握つていてことに気づかなかつたのだろう。あえて、黙つていたのかな。そんなのヤシロらしくないね。

思考が鈍くなる。体が沈む感じがする。私は、眠りに落ちていく。

## 嘘つきな青色（7）

私が住んでいた町は、とても大きな町とは言い切れなかつた。いつも誰かがどこかに出かけて、帰つて来ない方が多かつた気がする。例え帰つてもぼろぼろになつて、足や腕がなくなつている人もいた。大人は少なかつた。子どもはもつと少なかつた。老人なんて数える程度しかいなかつた。

子どもだろうが大人だろうが、関係なく訓練していた記憶がある。例えは剣の握り方、例えは罠の作り方、例えは魔法の使い方。町を裕福にするために、いつか幸せになるために、みんなみんな頑張つていた。

私は魔法が使えなかつた。全くできなかつた。魔法を使えるようにするために、変な薬が入つた注射を私の体に無理やり打たれたこともあつた。拒絶反応で体が痙攣して吐血して、しばらくの間動けなくなつた。押さえつけていた大人たちの失望したあの目が、今まで怖い。

だから文字通り『いらない物』だつた。どんなに他の子と比べて剣が上手でも、文字が綺麗にかけても、私はいらない物で役立たず。軽蔑されて、笑われた。歩いていたら後ろから突き飛ばされたこともあつた。石を投げられたこともあつた。直接殴られるのは、とても痛かつた。

そして、私の両親は毎日喧嘩をしていた。

いつだつたか、川の水で顔を洗つていたら、いきなり誰かが私の頭を水の中に押さえつけてきた。死ぬのかなつて思つた。このまま窒息死してしまうのかなつてそう考えた。それでもいいと思つていて、私の体は思つていることと全く正反対のことをしたのだ。近くにあつた石を握りしめて、押さえつけてきた人の頭を殴つた。

何度も何度も、鈍い音と感触がした。

やがて動きを止めたのは、手が真っ赤に染まって、その人が私の父親とわかつたときだつた。

その日から、一人とも私の存在を否定するようになつた。会話も食事も何もなかつた。家にさえ入れてくれなくなつた。仕方無く、私は毎日を外で過ごした。

ある日、教祖と名乗る偉い人がやつてきた。その人はかわいそうな町に『良いこと』を教えてくれた。

この町には守護神がおりません。守ってくれる風の神の気配がどこにもいないので。皆、神を呼びましょう。そうすれば、この町は幸福で満たされるでしょう。ただ、神はとても神聖なる御方なのです。私達様々な人種の血が混じつた人間では、神はおいでになりません。だが、幸運なことに純粹な血を持つ者がいると聞きました。その町人を神に捧げましょう。神はきっと喜ぶはずです。

周りの人が私に優しくなつた。両親が笑いかけるようになつた。それが全部偽りだと言うことは、最初からわかつていた。

その頃だろうか。それとも、もっと前からだろうか。私は物事に対して何も感じなくなつた。

何を言われても何も感じない、花を見ても何も思わない、食べ物を見ても食欲がわかない、太陽を見ても、月を見ても、空を見ても。ただ、そこに在るだけと思うだけ。ただそれだけ。

大切なものを、どこで置いてきてしまつたのだろう。

お別れの日。人々はそれをとても綺麗だと言つた。白色のドレス、煌びやかな装飾品。お嫁に行くみたいだねと誰かが言つた。右手には母親が、左手には父親が、私が逃げないようになつかりと手を握つて、教祖様が指定した場所へと歩いて行つた。

深い森の中で手首と足首を縛られて、おいてきぼりにされた。あの二人の口から、別れの言葉なんてなかつた。暗い暗い森の中。私

は何も言わず、何もせず、ただ暗闇を見つめてみた。世界は夜で、何もなかつた。

何もなかつたはずだつた。何もないはずだつた。それなのに音が聞こえたのだ。何かがどこかで低い唸り声を上げていた。私はそれが嫌だつた。押さえていたものが、なくなつたと思ったものが、全てでてしまいそうで、吐き出してしまいそうでどうしようもなかつた。誰もいないはずの森の中で、私はひたすら喋り続けた。もう、ここにはいない両親に向かつて。

ゆるして、ごめんなさい、だからいかないで、おねがい、こわいのあれがくるから、あれがくるの、

だつてわたしにはきこえるから、おどがあのおどが

なんだかないでいふよひにきこえるから、わたしまでかなしくなるわ

さみしいつていつてるの、だから、こわいの、

だつてわたしまでさみしくなるから

今まで、ずっとがまんしていたのに、はきだしてしまつそうでいやなの

だから、おねがい、いかないで

言葉なんか届くはずなんかないのに。私の口は止まらなかつた。暗闇の中、あの大きな金色の瞳がこちらを見ていた。どこか悲しそうで寂しそうな唸り声を上げて、生物学者とその愛弟子が来るまで、ずっと私を見つめていた。

あれが、神様なのだろうか。

だとしたら、神様つて人の形をしていないのね。

車輪が動く音が聞こえなくなつた。目を開けて起き上がり、周囲を見渡す。ヤシロの姿が見当たらない。ふと片手に視線をやると、自動式拳銃を握つたままだつた。寝ていても、拳銃を握つていた自分に苦笑してしまう。クマのぬいぐるみを抱えて幌をめくつて顔をだすと、見慣れた風景がそこにあつた。

私が暮らす小さな家。一階建ての家の前で、先生とヤシロが話している。先生が白衣のポケットから札束を取り出して、ヤシロに差し出した。ヤシロは躊躇いもせずに受け取り、枚数を数えている。何だろう。あのお札、結構な厚さだ。

「これくらいでいいかな」

「充分、足りるな。毎度あり、貰つておく」

「いらなくなつたら、返してね」

「誰が返すかもつたいたい」

「どういふこと。それ。

貴女を売るのかと、てつくりそう思つていたんだけど

違うわよ、なんでこんな時にあの人と言葉を思い出すかな。絶対、嘘。違うでしょ、先生がそんなことするわけないもの。でも、貰うとか、いらないとか、それつて、私。

やつぱり、私には『家族』なんて必要ないのかな。

「先生」

自分の声が震えていた。声だけじゃなくて、体全部が震えていた。震える足で荷台から降りた。右手には自動式拳銃。吸いつくように私の手の中には存在している。

「先生、どうして」

先生にゅつくつと歩みよる。あの人はいつも穏やかな顔で笑つ

た。

「力ナラ、お帰りなさい。お前に朗報があるんだよ」

私は先生の服の裾を掴んだ。先生はきょとんとして首を傾げる。

「先生、私を、買ったの……？」

ヤシロは私の頭を小突いてきた。なんだろうと思い、顔を上げると変な顔をしている。

「力ナ嬢、何言っているんだ？ お前が大事そうに拳銃を握っているのを見て、先生が買ってくれたんだ。勝手に箱を開けたと思えば、寝ていてる最中でさえ持っているもんな。そんなに気に入ったのか」

ヤシロの言葉を理解するのに、少し時間がかかった。

「え」

「先生っ！」

シスイが興奮した様子で走つて来た。今年で十六歳だったと思う。年齢に似合わず大人びているシスイが、幼子のような無邪気な表情になるなんて珍しい。何かを抱えて森の中を駆け抜けてくる。全速で走つてきたせいか、呼吸が乱れていた。

「しー兄どうしたの？」

「ああ、力ナ。帰つたのか、おかえり。ほら、これ見てくれよ」

私と先生とヤシロは、シスイの腕の中にある物を覗き込んだ。

「卵だね、しかも巣ごと」

先生の言うとおり、それは卵だつた。鶏の卵よりも大きくて丸っこくて、色は白色だけど汚れているせいか黒ずんでいる。枝や泥を固めて作った巣の中に、卵が三つ行儀良く並んでいた。

「やはり先生の予想は当たつていました。あれは今、卵を育てる時期なんですね」

「うん、それは嬉しいけど。……この卵、死んでるね」

先生はまじまじと見つめてから、そつと人差し指で卵に触れた。

それから卵を一つ手に取り、生まれてきて欲しかったなあとぼつりと呟いた。

「親はいませんでした。卵が孵らないとわかつて、捨てたんだと思

います」

生まれてきて欲しかった。声をださずに口だけで動かしてみる。私は望まれていたのだろうか。空っぽな、私が。

「ああ、そうだ。力ナラにお願いをしようかな」卵をシスイが抱えている巣の中に戻して、眼鏡の奥の目を細めて微笑んだ。私はこの笑顔に弱い。とても優しくて温かいから。の二人にはなかつた表情だから、自分はどんな顔をすればいいのかわからなくなる。嘘について同じように笑つて、誤魔化せばいいのだろうか。

何と訊こうと口を開いた途端、地響きがして地面が大きく揺れた。地震かと思つたけどそれは違つた。木が数本横倒しになり、止まつていた鳥が一斉に空へ飛びたつ。ずるずると引きずるような音を立てて、何かがこちらに近づいてくる。

「うわお。もしかしてその卵、諦めてなかつたんじゃねーの」

口調は呑氣だがヤシロは苦笑していた。背中に背負つている東の国で作られた、刀と言う刃物に手を伸ばす。細い刀身が現れ、日光に反射してきらきら輝いた。

「シスイちゃん、協力できる?」

シスイは溜息をつき、すぐに頷いた。お願いしますと言つてから、巣を先生に預ける。

「俺のミスです。行きます」

構えの体勢をとり、やつてくる何かを睨みつけた。

「でつかいなー」

ヤシロはそれを見上げると感嘆の声を上げた。私も同じように見上げる。木を倒しながら現れたのは、体全体が緑色の鱗で覆われている魔物。赤い舌を出したり戻したりして、長くて太い体を引きずりながらずるずるやつてくる。もしかして、これって

大蛇。

「あああああああ……」

かみさまが、いま、わたしのめのまえにいる。

私は拳銃を構えた。自分の目から涙が零れているのがわかる。視

狙つねあの金色の瞳。神様と同じ色の皿。

私の拳銃を持つ手をシスイがそつと握った。そのまま腕を下ろされ、拳銃を持ったまま機能が失ったように揺れた。シスイは私の顔を覗き込んで、ゆっくりと口を開く。

「し」兄

しー兄の手は、あの人達の手と違つて温かいね。  
なんて恥ずかしいことを言えるわけがないけれど。  
私はシスイの言葉を最後まで聞かずに手を振り払つて、できる限  
り精一杯の笑顔をつくつた。

「私も、幸せだと思っていたよ」

シフイは先生と和がいるから幸せだと喜んでいた

あなたのその言葉に、偽りがないことを信じてみたい。

だって、私もそうなりたいから。

なぜだか溢れてくる涙を拭つて、金色の瞳を睨む。右手に力を込める。すると指がぴくりと動いた。まだ動けると確かめた後、腕を上げて大きな瞳に標準を定める。今度は震えない。大丈夫。

この大蛇は、あの時の蛇と違つことはわかっている。それでも、私は。

泣いているのを止めなくちゃいけない。誰もいない森の中で、本当は泣いていた女の子を助けなきゃいけない。私はもう『私』ではないのだ。

「ごめん」

あの大蛇に言つたのか、私に言つたのか、誰に対しても言つた言葉

なのがわからなかつた。

銃声が森の中に木霊した。

## 嘘つきな青色（9）

もしもし神様聞こえますか？

今、懺悔をしますね。あの時、生贊にされなくて「めんなさい。本当は、死にたかったです。

嘘じやありません。

お父さん、お母さん。役立たずで、「めんなさい。死ななくて「めんなさい。」

でも、私はそれ以上に、今は生きたいんです。

無くしたものはたくさんあるけど

それをまた一つ一つ捨えることができるのなら、とても素晴らしいことだと思うから。

ここで生きていることを、人間であることを、誇りに思いたいから。

だから、私、決めました。

笑顔で怒る人は怖いと思った。先生に怒られたのは久しぶりだ。説教なんかなく、床に正座したまま無言の圧力で小一時間ぐらいい。私は動くこともできず、ずっと固まっていた。

「い、ごめんなさい……」

「心配した。凄く心配したよ、僕は」

「本当、ごめんなさい……」

俯いた途端、先生の溜息が聞こえた。おそるおそる顔を上げると呆れたように笑っていて、ソファーに座つてもいいお許しを貰えることができた。私は痺れた足を無理矢理動かしながら、へばりつくようにしてソファーに座る。いや、実際は横になつて転がった。

「えっと」

撃つた後、大蛇が憤怒したのを覚えている。やつぱり私に襲いか

かつてきて、大きな口を見たとき、これで本当に食われるんだなと思った。それから首筋に鈍い音がして視界が真っ暗になった。

「カナラがその場にいたらややこしくなりそうだから、ヤシ口に気絶させてもらつた」

「そりなんだ……」

首の後ろあたりが痛い。きっと手刀でもやられたのだと思つ。

「大蛇は、どうなつたの？」

「死んだよ」

平坦な声であつたりと言つた。私は先生を思わず凝視してしまつた。

「シスイとヤシロが解体してゐる。研究できそうな物は保存して、売れそうなものは売るつもり」

「そつか……」

「悲しい？」

先生は寝転がつてゐる私の横に腰を下ろし、やんわりとした表情で訊いてきた。

今までの私なら嘘をついて頷いていた。

「何も、感じません」

私は正直にはつきりと言つた。嫌われるんじゃないかと思い、戸惑いながらも先生の黒色の瞳を見る。先生の黒は夜遅くまでずっと研究し続けたからとそうなつたんだと、また勝手に思いついた。熱中しすぎてそれしか見えなくなつたから、他の色が逃げていつたんだ。

それでも先生の黒は、とても優しい。

「カナラは感受性が低いのかな。あるいはその逆かも」

私が嫌う銀色の髪を撫でながら、先生はいくつか質問してきた。

「太陽を見て何を思つ?」

「眩しい」

「水は?」

「飲み物」

「神様は？」

「崇められているもの」

「僕は？」

「先生」

「シスイは？」

「しー兄」

「ヤシロは？」

「嫌い」

先生の口が止まつた。しばらく何かを考え、微笑しながらこんなことを言った。

「家族は？」

「……好き」

「よひしい。じゃあ、ここは格好良く断言しよ。僕はカナラを捨てないよ」

こういつ時なんて言えぱいいのだら。言葉に迷つてると、先生はまた質問をしてきた。

「僕は？」

「格好いい！」

「手伝えっ！」

手も顔を服も血に染まつたヤシロがドアを開けて入つてきた。私と先生が座つているソファーに近寄り、解体用のナイフを先生に向けて笑う。なぜだか頬が引きつっていた。

「あれ、でかすぎだ。弟子は自分の分だけやって、おれの手伝い一つもしてくれねえしな」

「ヤシロ、家が汚れるから出て行ってくれないか

「お前なあ！」

体を洗うことを面倒がるくせに、汚れるから近づくなと先生は言い出した。ヤシロは仕留めてやつたのは自分だから、少しは手を貸せと要求してくる。大人げない一人の言い合ひに困つていると、白衣に点々と血をつけたシスイがドアの前に立つていた。私に手を振

つていて。こちらに来いと口を動かしていた。

「…………」

ちょっと行くべきかどうか迷ってしまった。言い争いをしている二人を無視してシスイの傍に行く。血はついていたけれど、ヤシロほど酷くはなかつた。やはり、普段から解体に慣れているからだろうか。それでも汚れていることには変わりないので、シスイの白衣を引っ張つて文句を言うことにする。

「汚れ、取れないと思うけど」

「あー、ごめん」

笑顔で謝れても納得いかない。シスイに怒つても白衣が綺麗になるわけじゃないから、それ以上、言わないことにした。新しい物を新調しようかと考えていたら、彼は私の手を引いてドアを開けて外出ようとする。少しだけ血が手についたけど、特に何も感じない。シスイがそれに気づいて慌てて手を離した。

「うわ、悪い。ついた」

「いいよ、気にしてないから」

血から連想するものといえば何だろう。『赤色』の魔族のお姉さんかな。

「用つて何？」

「先生にお願いをされただろ」

ドアの外に置いてあるバケツを拾い上げ、その中から小型のシャベルを取りだした。

「卵のお墓作るう」

お墓。その言葉を小声で繰り返して

「大蛇のは？」

疑問に感じたこと問うと、シスイは苦笑した。

「大きすぎて作れないな」

## 嘘つきな青色（10）

さくつかくつ。地面を掘り起こす音が森の中に響く。私とシスイは河原に近い場所に、お墓を作ることを決めた。大型のシャベルでも持つてくるかと訊かれたけど、こういう淡々とした作業は苦ではないので構わずやり続ける。一人で掘り起こしながら、近くで流れる川の音を私は聞いていた。水の音。私はの中に頭を押さえつけられたのだ。息ができなかつたなあと他人事のように思い出す。

「このくらいでいいだろ」

兄弟一緒に良いという話がでたので、同じ墓の中に埋めることにした。穴を掘る手を止めて卵をそつと持ち上げる。丸くて大きな卵は、文字通り冷たかった。

「ああ、死ぬつてこういうことなのか。それは少し、嫌かもしけない。」

三つの卵を穴の中に入れて土を被せた。土に埋まつて姿が見えなくなる卵を見ながら、私は咳いた。

「あの人達のお墓、あるのかな……」

「あの人達つて？」

咳きが聞こえたらしい。スコップを動かしながらシスイが訊いてくる。

「本物の両親」

シスイの手が一瞬止まった。

また動き出してしばらくしてから、私の顔を見ずにふうんと言つ。

「死んでいたら、あるんじゃないか」

「かもね」

あの町はどうなつたのだろう。あの神様はどうしたのだろう。

教祖様は、町人は、あの二人は。

空を見上げて考える。空はとても綺麗な青色。同じ色をみたこと

がある気がした。

「そうだ。私さ、決めたことがあるの」  
土を全て被せた後、小石積み上げて墓標代わりに置いた。手についた土を払つて立ち上がる。シスイも立ち上がって、小さなお墓に目を瞑つて黙祷を捧げた。ゆっくりと瞼を開けば

「私、商人になるよ」

自分の声が落ち着いているのがわかつた。

「いろんな人に会つて、いろんな人とたくさん話したいの。無くしてものはたくさんあるけど、それをまた一つずつ見つけられることができるのなら、それはそれで幸せなんだと思つ」

空の色を見て思い出した。そつか、あの色は私の瞳と似ているのだ。空は簡単に色を変えるから、もしかしたら本当の色などないかも知れなくて、忘れているかも知れない。ころころ変わつて何が何だがわからなくなつて、だから違つ色になる。違う色を演じて自分を作つている。

それつてさ、嘘つきだよね。

だとしたら、空は嘘つきの色。空はきっと私の色。

「そつかー、それはそれで寂しくなるなあ

「嬉しそうに聞こえるんだけど」

「妹が旅に出るんだよ。笑つて見送らなくちゃ」

シスイは本当に、私が言つて欲しいことを簡単に言つから卑怯だと思う。

私の兄と名乗る人は、どこにでもあつて私が一番聞きたかつた言葉を言つてくれた。

「行つてらつしゃい



## 虚つきな青色（一〇）（後書き）

第一章完結です。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございます。

この話自体、今から数年以上前（数字を数えるのも怖いくらい）に書き上げたもので、読み返すのが恥ずかしいほど文章が拙いです。それでも非常に思い入れが深い作品です。何度も続きを書こうとして、挫折し、練り直し、書き加え、時には削ることもありました。

絶対になんとしてでも、彼女の物語は書き上げようと決め、今もこうして低速ながらもあれこれ動いています。

これは彼女にとっての第一歩です。

これからどうなるか、見守っていただけると幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5385z/>

---

アルペジリオ - 優しい商人の話 -

2011年12月25日22時50分発行